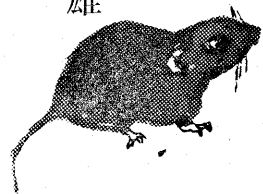


入試と幼児

竹田俊雄



(一)

十一月月上旬にとり扱った教育相談の一つにこのようなケースがあった。

東京のZ幼稚園児T(六才六か月男)について、母親が来談して
いうのには「このごろ遊ぶ時間がないようですが、どうしたらよい
でしょうか」(話したことはのまま)というのである。たずねてみ
ると、この家庭ではTをP小学校(仮名)という東京でもっとも有
名な私立校の一つに入学させようとして、「テストの練習」をさせ
ている。

月曜 幼稚園の帰りにR町(園より約二キロ半)のテストの
「個人指導」(といっても、話によると、七・八名の幼児が
来るとのこと)をしているところへ行き、二時間「アチーヴ
式」で練習する。

火曜 幼稚園(保育は午後一時半まで)に残って午後三時ま

で「アチーヴ式」テストの練習(園から自宅までは約二キ

ロ弱)。

水曜 幼稚園にいき残り練習(火曜と同様)。

木曜 R町の個人指導(月曜と同様)。

金曜 特に練習をしない日。

土曜 午後家庭に「テストの先生」が来て、一時間「アチーヴ
式」の練習。

日曜 午前に一時間、土曜と同様に先生が来て練習(四ペー
ジ
ずることになっている)。

P校の入試まで、あと一月とないのであるが、どうしたらよいか
という最初に述べたような奇妙な主訴である。

他に形容のしようがないので奇妙ということばを用いたのである
が、入試の歯車の中にまき込まれてしまった子と母の実に当然な訴
えであるともいえる。私たちは普通の公立の小学校へ進むことも、

私立や国立の小学校を選ぶことも、親の自由であると考えているが、こういう親たちにとっては、そうでなくなっている。P校へ入りたいというTの親ばかりではない。他の私立のG校、F校、国立のE校、S校その他もろもろの「特殊小学校」を望んでいる親たちは、それを愛児が社会へ出るためのベルト・コンヴェーヤーと考へ、動きのとれない考え方をしている。考え方というよりは、コンヴェーヤーからはずされた場合の不安の情緒に圧倒されてわくづげされた態度といった方が適当であろう。

「××校に入学させたいと思いますがそれだけの力がありますでしょうか」という親に、私たちは子どもの知能や性格的な特徴などを調べる。そしてそれが不適當と診断した場合、入試というのは好むと好まないとにかかわらず選抜試験であり、お子さんの現実はその水準からかなりへだたっている、容易に変えられるものではないから、他の進路に向かった方がよいと懇々と説くと、それをいちいちうなずいてきていた親が腰をあげかけながら「それではどう導いたら××校に入れるでしょうか」ときき返して、今まで話した長い時間が全然むだであったと感ずることがしばしばあるのもこれである。

特殊小学校入試の季節は三月ではない。入試は前年の十一月からはじまっているし、その入試に幼児の生活がかきみだされるのは、その一年も前から、場合によっては二年も三年も前からで、ある一部の子どもたちにとっては、幼稚園期全体が入試の季節とさえなっ

ている現状である。

(二)

今、手元にある「文部統計速報」から、このような「特殊小学校」がどのくらいあるかを調べてみよう。厳密に考えると、こうした親たちの希望の対象とならない性質の学校もこのうち若干はあるが、大体全国で国立小学校七五校、私立小学校一五六校（昭和三年五月一日現在）というのがこれにあたる。そしてこれらの小学校の一年に入っている児童数は、国立七、四一七名、私立七、六八九名であつて、計一五、一〇六名となり、この数は同年小学校に入学した全児童一、九七八、一四八名の〇・八パーセントに達していない。

問題は、入試を受ける幼児の実数なのであるが、これは統計的には把握しがたく、個々の特殊小学校の志願者数が入学者数のそれぞれ数倍（これにはかなり学校差がある）あり、逆に特殊校が数校ある地方では同一の幼児が二校以上志願する場合もあることから推算するほかはないが、この全幼児に対するパーセントは全体的にみればあまり大きな数になるとは考えられない。幼児の入試を児童問題としてみるとき、一応このような数字を念頭におく必要がある。

しかしこれは、実は地方差がかなりあることで、全国四六都道府県でこの種の特殊校が一枚だけの地方が十四地方ある反面、東京には国立私立あわせて五八校あり、その一年生の総数は三、九九四名で、全児童数一四一、三八二名の二・八パーセントとなっている。特殊

校を志願するものの中には、幼稚園教育を受けていないものもないではないが、大多数は幼稚園に在園して、小学校一年入学児童のうち、幼稚園教育を経験したものが、東京の場合はおよそ三割（全国平均は二割強）という数を考慮に入れれば、幼稚園の領域の内でのこの問題の比重は地方によっては相当な重さをもってくる。

このように数字をあげてくることは、幼稚園教育の中で、入試の問題がどのように扱われることが妥当であるかを考えていたかどうかからであって、それがあまりに過大視されても過小視されてもならないからである。はじめにあげたようなケースの背景にはこのような数字が存することを、承知していなければならない。

(三)

入試は幼児にどのような影響を与えるであろうか。幼稚園教育というものを考えてみると、入試を受けない幼児への影響もみのがしてはならない。これには地方差や、さらに幼稚園差が存するわけであるが、大多数の場合はその園児は入試とは無関係なのである。もし園の保育が入試のための保育といわれるものに偏るならば、園の子どもたち全体が均等という名目からそのまぎぞえを食うか、見すてられてしまう。園に行っても先生が楽しく遊んでくれなあとと思うようになる。

入試を受ける子自身については、園でいわゆる準備教育をしない場合には、親の中にはそれを不満に思うものも少なくないので、そ

の気持が子どもにも反映して園で熱心に遊ばなくなり、ただぼうっとしていることもある。園でも型通りの準備に没頭するならば、親の夢中な態度とともに、子どもを極端な緊張におとし入れてしまう。

そして幼児はおとなの問いに対しては型にはまった答えや、まったく的はずれた答えしかできず、その情緒において常にいらいらして、怒りやすく、泣きやすく、疲れやすい状態になる。ことに親がこどもの心身の能力を無視して、ひたすらに入試合格を願うときは、その弊ははなはだしいものとなる。睡眠障害を生じるものや、緘黙におちいるものさえある。

何故に親たちのある人々が、このような態度で特殊校への入学を追求するのであるか、社会はこれを考えてみなくてはならない。教育的な意味において特殊な目標をかかげる小学校の存在することは妥当であり、それに相応する考え方をもち親がこれを望むことは当然であるが、現状はこれからはるかに遠く、特殊校でありさえすればと思っているものも少なくない。全然校風がちがう数校を志望するものには、どう話したらよいか、とまどう場合もある。

この親の態度は社会における特殊校のあり方にも通じ、また普通の小学校の現状にもいろいろの関連があつて、幼児教育者の間だけでは、それと親との関係だけでは解決できないものがあるが、幼児を保育するものは、当面の問題として、幼児を過度の緊張におとしきれないだけの措置をとらなければならない。

(愛育研究所)